

言語と理念性：

メルロ=ポンティ『フッサール「幾何学の起源」講義』におけるハイデガー言語論の導入 をめぐる¹

澤田哲生²

序論

1959-1960年度のコレージュ・ドゥ・フランスにおける月曜講義で、メルロ=ポンティはフッサールの『幾何学の起源』（以下『起源』）を重点的に論じている。講義におけるメルロ=ポンティは、『起源』の概要を最初に説明した後、前半部分（フッサール全集第3巻の365ページから374ページ）の翻訳を行いながら、この部分で提示されるテーマ群（「理念」、「客観性」、「言語」、等々）を繰り返

¹主に言及されるテキストの略号は下記の通り。引用に際して略号と原文および邦訳のページ数を表示する。既存の翻訳は可能な限り参照したが基本的には論者が訳出した。訳者各人のご理解を請いたい。『講義』の邦訳は、PUFの修正版を底本としている。この版を提供して下さった訳者の一人である本郷均氏に感謝申し上げます。

NCOG1959: Maurice Merleau-Ponty, *Notes de cours sur L'origine de la géométrie de Husserl*, Paris, PUF, coll. «Epiméthée», 1998 (モーリス・メルロ=ポンティ、『フッサール「幾何学の起源」講義』（付・メルロ=ポンティ研究の現在）、加賀野井秀一、伊藤泰雄、本郷均訳、法政大学出版局、叢書ユニベルシタス815、2005年）。

Hua. III: Edmund Husserl, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und transzendente Phänomenologie* (1936), Husserliana, Bd. VI, Haag, Martinus Nijhoff, 1962 (エドムント・フッサール、『幾何学の起源』（付・ジャック・デリダ、『幾何学の起源序説』) 新版、田島節夫、矢島忠夫、鈴木修一訳、青土社、2003年)。

GA12: Martin Heidegger, *Unterwegs zur Sprache* (1959), Gesamtausgabe Bd. 12, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann Verlag, 1985 (マルティン・ハイデガー、『言葉への途上』、亀山健吉、ヘルムート・グロス訳、ハイデガー全集12巻、創文社、1996年)。

²日本学術振興会特別研究員 PD (東京大学)、東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学研究教育センター」(UTCP) 共同研究員。

し分析している。そして同時期のフッサールの遺稿³の分析で講義を終える。『フッサール「幾何学の起源」講義』（以下、『講義』）でとりわけ重要な箇所の一つは、ハイデガーの著した『言葉への途上』所収の「言葉」（1950年）と題された講演論文の導入部分である。本論で詳しく見るように、メルロ=ポンティは『起源』の概要を説明する過程において、フッサールが提示する「言語 *Sprache*」という概念に対して独自の解釈を提示する。そしてハイデガーの言語論を導入することで、この独自の解釈はさらに徹底される。本論では、最初に (I) 『幾何学の起源』の前半部分を確認する。次いで (II) メルロ=ポンティによる解釈を分析する。そして『言葉への途上』導入の位相と重要性を検討することで (III)、メルロ=ポンティ独自の現象学的言語論を結論として提示することが本論の目的である。

I フッサール『幾何学の起源』

I-1 意味の発生と制度化

最初に、『起源』に関してメルロ=ポンティが主に論じた部分の議論をフッサールに即して確認してみたい。フッサールは「幾何学の起源」に関する探究を次のように定義している。「幾何学の起源への問いは […] ここでは文献的・歴史的な問いではない。純粋に幾何学的な定理、証明、理論を言明した最初の幾何学者たちや彼らが発見した定理に関する探求でもない。むしろわれわれが持つ関心は最も根源的な意味に関する遡及的な問いである。この問いのなかで幾何学は成立し、それ以後数千年来の伝統となったのである」（Hua. III, p. 366 / p. 257, 強調は引用者）。「幾何学の起源」の探究は、幾何学という認識形式の成立および発展に寄与した者たち（ユークリッド、ピタゴラス、ガリレイ、等々）とその業績に関する研究のことではない。フッサールによると、幾何学者たちが個別に持つアイデアないし理念は一つの「意味」を形成する。こうした「意味形成 *Sinnbildung*」（Hua. III, p. 367 / p. 263）を通じて認識形式としての幾何学は成立する。さらに、この形式が世代をまたぎ数千年来の「伝統」となる。幾何学の起源を問う作業は、個別の事象に備わる「意味」が発生し、そこから形成された認識の形式が世代を超えて連鎖（「世代連鎖」、*ibid.*）してゆくプロセスを探求する作業なのである。

幾何学という形式が一つの「伝統」となる事態は、幾何学という形式の生成により認識主体の活動が制度化される事態を意味する。フッサールが挙げる例はこのことを明確に説明している。われわれ現代

³ Cf. E. Husserl, „Die Ur-Arche Erde bewegt sich nicht. Grundlegende Untersuchungen zum phänomenologischen Ursprung der Räumlichkeit der Natur“ (1934), in *Philosophical Essays. In Memory of Edmund Husserl*, edited by Marvin Faber, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1940, pp. 307-325.

人は幾何学の「最初の創造者」(Hua. III, p. 366 / p. 260) をもちろん知らない。知っていたとしても、断片的な理解にとどまるはずである。さらには幾何学の諸定理をくまなく理解しているわけではないにも拘らず、幾何学の定理および理論を習慣的に使用している。意味の発生を通じて学問形式となった幾何学は、認識主体が明確に意識することなしに、その主体の時間・空間内における認識活動を支えている。つまり認識行為の「根源的な制度 *Urstiftung*」(Hua. III, p. 366 / p. 260 ; p. 368 / p. 264) として機能しているのである⁴。このように認識主体の活動が制度化されることにより、「伝統」および「文化世界」(Hua. III, p. 366 / p. 260) が構成される。ここで問題となる文化世界は「因果的」(*Ibid.*) に生まれる世界ではない。なぜなら、すでに見たように、認識主体は自らが用いる形式(幾何学)の起源を十分に理解することなく、認識活動に従事しているからである。制度の上に構築される世界は、むしろ「精神的」(Hua. III, p. 366 / p. 261) な形で生成した世界を意味する。意味の発生と認識主体の制度化が『起源』におけるフッサールの関心なのである。

I-2 理念的客観性

意味の発生から制度化への移行が成立する上での第一の条件として、フッサールは「理念的客観性」もしくは「理念的対象性」という概念を提示する。「ところが幾何学的な存在は心的な存在でもないし、諸人格の意識の領野における諸人格の存在でもない。幾何学的な存在は『どのような人』とつても客観的に現存する存在である〔…〕」(Hua. III, p. 367 / p. 264)。幾何学という認識形式は、幾何学者個人が自分の意識の内部に有するアイデアないし理念から生み出したという点において、最初は、「心的」ないし「人格」的な形式である。しかし上記のフッサールの指摘によると、認識主体の制度化が達成される上で、幾何学者各人の理念はある一定の客観性を獲得する必要がある。つまり各人の内部で生まれたアイデアは、主観的な枠組みを超えて、「どのような人」にとつてもアクセスすることのできる対象とならなければならないのである。ゆえにフッサールは、「幾何学的な存在は、その根源的な制度化以来、全ての人間、まずはあらゆる民族、あらゆる時代の現実的および可能的な数学者にとつて接近可能なあ

⁴ *Stiftung* (*Urstiftung*) の邦訳は「創設(原創設)」となっている。メルロ=ポンティは『知覚の現象学』においてこの語を「基礎づけ *fondation*」(M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception* (1945), Paris, Gallimard, coll. «Krisis», 1998, p. 148) と訳出し——明らかな誤訳であるにせよ——、1954年のコレージュ・ドゥ・フランス講義以後は「制度 *institution*」という訳語を採用している(Cf. M. Merleau-Ponty, *L'Institution La Passivité. Notes de cours au Collège de France (1954-1955)*, Paris, Belin, coll. «Littérature et politique», p. 38)。議論の整合性を考慮した上で、本論は「制度」という訳語に統一した。

る独自の超時間的な現存を、しかもそのあらゆる特殊形態において持っている」(Hua. III, pp. 367-368 / p. 264) と言う。個人が内面に持つアイデアとして生まれた幾何学が認識形式としてある一定の制度となるためには、その形式が、各時代、各人の生活上のあらゆる個別の認識形式に対して普遍的な規定値として機能しなければならない。上記の引用から説明するなら、それは「全ての人間」、「あらゆる民族」および彼らの言語によって使用が可能であり、さらには後続する探求者によって発展の可能性を含む形式でなければならないのである。

幾何学という認識形式がこのように各個人、各世代の間で伝達可能となる条件こそが「理念的客観性」である。「それ〔この文脈では「理念的対象性」〕は文化世界における精神的な産物の全体的な部類に固有である。全ての科学的な形象および科学そのもの、さらには文芸上の形象もこうした精神的な産物に属する。この部類に属する作品は道具や建築物やその他の部類に属する作品とは異なる。それは互いに等価な多くの事例のうちでの反復可能性を持つのである」(Hua. III, p. 368 / p. 264)。この文脈において、フッサールは幾何学を「精神的な産物」と規定している。そして精神的な産物が世代を超えて伝達される仕方を「反復可能性」と規定している。フッサールの記述に従うなら、ハンマーや建築物は精神的な産物ではない。確かにこれらの物質は私の死後も残るはずである。しかしそれらは世代から世代へと受け継がれる過程において磨耗し消滅する。これに対して、幾何学のような認識形式は世代を超えて伝承されても磨耗することはない。例えば、「ピタゴラスの定理」はピタゴラスにより発明された。言い換えるなら、それは発明の瞬間の「一度だけしか存在しない」(Hua. III, p. 368 / p. 264) 事象である。ところが一度存在し始めるやいなや、以後はあらゆる民族があらゆる言語で使用することが可能となった。つまり物質的な消耗を被ることなく、あらゆる世代の間で「同一の」(*Ibid.*) 形で繰り返し使用することが可能な形式となったのである⁵。「理念的客観性」は 1) 精神的な産物(幾何学、文芸、等々⁶) に固有の客観性であり、2) 時代を超えて同じ表現の反復を可能にするのである。

⁵ 幾何学的な水準における同一性に対して、道具の側にもある一定の同一性があることをマルク・リシールは主張している。例えば、ハンマーは使用者である私の身体との関連において使用上の同一性がある。ハンマーが破損した後も、私は新しいハンマーを購入し、そのハンマーと新たに使用上の同一性を確立することができる。こうした極めて身体的な水準における同一性を、リシールは「実践的な同一性」と呼び、フッサールの区分に疑問を投げかけている。Cf. Marc Richir, *La crise du sens et la phénoménologie. Autour de la Krisis de Husserl, suivi de Commentaire de L'Origine de la géométrie*, Grenoble, Jérôme Millon, coll. « Krisis », 1990, p. 281.

⁶ ただし客観化の度合いは、ジャンルにより異なる。フッサールによると、文芸は言語表現による反復可能性を必要とするのに対して、科学的な客観性には研究成果の翻訳可能性が必要とされる。「しかし文芸の最も

I-3 言語共同体

理念から形成された意味が制度に移行する上での第二の条件としてフッサールが提示するのは、「言語共同体 Sprachgemeinschaft」 (Hua. III, p. 369 / p. 268) という概念である。「本源的に内的かつ人格的な起源において、幾何学的な同一性は最初の発見者の意識に属する空間内の形象であった。いかにして幾何学的な同一性はこの起源からその理念的な客観性にたどり着いたのか」 (Hua. III, p. 369 / p. 266) とフッサールは問う。この問いに対して、「言語のなかでこそ、この同一性はいわば自らの言語的な身体 Sprachleib を受け取る」 (Ibid.) と答える。理念は言語を媒介に表現されることで、「内主観的な形象から客観的な形象を作り出す」 (Ibid.)。個別の理念が客観性を獲得する上で、言語とその表現機能はある一定の条件として機能するのである。

言語表現は、幾何学と認識形式の世代を通じた反復可能性の構築に寄与する。フッサールによると、このことは、言語表現が自己と他者、人間と世界、等々の諸関係に浸透している事態も意味している。言語は「人間の人類における機能としての発話と人間的な現存の地平としての世界の関係」 (Hua. III, p. 369 / p. 269) を構築する上で重要な役割を担うわけである。この文脈において、自己と他者もしくは自己と世界の関係の基盤は「地平」ないし「世界」と規定される。われわれが注意を払うにせよ、そうでないにせよ、われわれはこの「世界」ないし「地平」を意識している。例えば、他者が私と異なるものとして理解されるのは、この地平の内部で他者が「『私の』別人として私によって意識される」 (Hua. III, p. 369 / p. 267) からである。

フッサールによると、時間・空間的な地平における言語上の伝承は直接的な口承のみならず、書き物を通じた伝承も含む。「それにより、書き記す行為を通じて、根源的な意味の様態と意味形象の変容は、言明へと至る幾何学的形象の明証性に属する幾何学的な領野において達成される。書き記す行為はいわば沈殿するのである」 (Hua. III, pp. 371-372 / p. 273)。表現された意味が形となり（「意味形象」）後続の世代に伝承される。このことは形となった意味がある一定の文字言語となり沈殿する事態を示し

広い概念はそれら [科学的な形象] すべてをも含む。すなわちその客観的存在には、言語的に表現され繰り返し表現可能であること、さらに明確に言えば、たんに言説の意義、意味として客観性すなわちだれにとっても現存をもつことが属している。客観的科学に関して言えばそのことはさらに特殊な仕方ですらあてはまる。すなわちその科学にとって、研究成果の原語と他国語への翻訳との間の相違はその同一的な接近可能性を破棄するわけではない。ないしはそれを単に非本来的、間接的なものにするにすぎない」 (p. 368, n. 1 / p. 264)。

ている。そしてこの沈殿した意味が後続する世代によって言語上で表現されることで再び活性化（「再活性化」、cf. Hua. III, p. 371 / p. 273）される。このように地平を媒介とした言語活動は、形となった意味を直接（口承）かつ間接的（「書き記す行為」）に伝達する活動なのである。

言語による伝承という観点から、フッサールは言語活動の位相を次のように説明している。「意識の面から見て、成人の正常な共同体（異常者や幼児の世界はこれから除かれる）が、人間性の地平として、また言語共同体として優先される」（Hua. III, p. 369 / p. 268）。理念的客観性の構築に最も適った条件をフッサールは、「成人」で「正常」な言語主体からなる共同体と規定している。なぜなら理念を客観化する作業は、事象に「名」を付ける作業であるからである。「すべてのものには名があり、ないしは最も広い意味で名付けられるもの、すなわち言語的に表現しうるものである」（Hua. III, p. 370 / pp. 268-269）。言語表現の能力が最も成熟した主体は対象を客体として個別化する（名を与える）ことができる。1) 地平を媒介とした「言語共同体」の形成、2) 意味の客観化（「名付け」）——この二点の言語的側面が、理念として発生した意味の制度化にとって第二の条件となるのである。

II 『幾何学の起源』講義』

II-1 理念

『講義』におけるメルロ=ポンティは、フッサールが提示した「理念」と「言語」に対して独自の視座を提示している。最初にメルロ=ポンティは次のようにフッサールに同意する。「この本源的な作用〔意味形成〕において、幾何学は個人的な生の一契機にすぎません。368 ページ参照しましょう。ところで幾何学は別のものです。つまり理念的な客観性です。それは超時間的で、すべてに対して、またすべての時代にアクセスすることができるのです」（NCOG1959, p. 24 / p. 32）。理念から産出された構築物は、あらゆる人間とあらゆる時代に通用する。ゆえにメルロ=ポンティはフッサールに同意しつつ、それが「超時間的」とであると指摘する。

ところが次の指摘において、彼の解釈のニュアンスが若干変化する。「言語そのもの⁷は理念的な存在から作られています。ライオンという語はドイツ語においてただ一度存在しただけです⁸。しかし

⁷ 修正版は *langage humain* を *langage lui-même* に修正している。

⁸ フッサールの表現。「例えばライオン *Löwe* という語はドイツ語においてただ一度しか現れてこない。それはだれが何回口に出して言おうと同一的なものである。しかし幾何学の用語や命題や理論——純粋に言語的

幾何学により表現されたものは、幾何学の彼方において、理念性の二次的な層です」（NCOG1959, p. 25 / p. 32、強調は引用者）。メルロ=ポンティは理念から客観性の構築に至るプロセスを説明しており、この点はフッサールに同意している。ところが理念的な客観性に属する精神的な産物（幾何学）を通じて表現された事柄は、理念とは別の層（「二次的な層」）に属することも指摘している。すでに見たように、フッサールにおいては、最初に個別の理念があり、次いでこの理念を客観化する枠組みにおいて言語表現は必要とされた。これに対して、メルロ=ポンティは理念から生み出された表現は、もはや理念そのもの（「非時間性」）の実現ではなく、当の理念とは別の水準（「二次的な層」）に位置することを主張している。『講義』が進むにつれて、この区別はさらに明確となる。

彼〔フッサール〕が言わんとしたのは、理念性は言語上の了解 *Verstehen langagier* との対比において一次的なものでも、二次的なものでもないということです。理念性は言語の中で生じ、それは実証的な内容のように言語に還元されないのです。しかしそれはある上位の可能性のように言語を支配することもあります。理念性は自己-他者の連結の番としてあり、それはこの連結のなかで作動しており、実効的であり、この連結のうちで連結によって実現されるのです（NCPG, p. 27 / pp. 35-36）。

「理念性」は、すでに見たように、そのものにおいて時間を越えた水準に定位される。フッサールにおいては、個別の理念が最初に存在し、次いでその客観化のプロセスにおいて言語表現が必要とされる。これに対して、上記の引用において、メルロ=ポンティは理念性と言語表現が同等の位相にあることを主張している。理念性は「そのものとして」（NCOG, p. 35 / p. 45）は成立せず、それは「言語の中で」のみ実現される。『起源』に即して説明するなら、幾何学者が個別に有する理念は、それが彼により表現された時ないし後継する世代により言語上で「反復」された場合にのみ顕現するということである。ゆえに、メルロ=ポンティは、「理念性は私が反復することのできる歴史の内部で生み出される」（*Ibid.*）と言うことで、理念性の超時間的な側面よりもその歴史的・時間的な展開を強調する。

このように理念性と言語は、メルロ=ポンティにとって、「一次的」／「二次的」という区別から論じることができないのである。彼がむしろ重要視するのは、理念性が世代間における交流の媒介（「番」）として機能する事態である。ある世代に属する自己と前後の世代に属する他の自己との交流の媒介となる限りにおいて、理念性は「実効的」な価値を備える。以上のように、メルロ=ポンティは、

形象とみなされた——がもつ理念性は、幾何学において言表されたものや真理として妥当させられたもの——理念的幾何学的対象、事態など——の理念性ではない」（Hua. III, p. 368 / pp. 264-265）。

理念がどのようなプロセスを経て客観化されるかという問題よりも、言語を媒介とした世代間の交流に際して理念がどのように作動しているかという事態に大きな関心を払っていたことが理解される。

II-2 言語

『講義』におけるメルロ=ポンティはフッサールが『起源』において提示する「言語」という概念に対しても独自の解釈を施している。

言語は理念性に属する潜在的な交流、先存、永続性です。というのも、言語の内では、表現されたものがその存在様態を変えるからです。諸々の語、書き物は物理的な諸事物のように客観的に存在します。そして、この永続的な存在において、これらの語や書き物は自らに備わる意味を活動性として伝達します。この活動性は暗闇に沈みこんだのですが、再び覚醒し、活動性へと再び変容されうるのはです。伝達された意味は、人間たちが語る存在 *sprechendes Wesen* に属しており世界が語りうるものである限りにおいて、「忘却され」、「沈殿し」そして「再活性化されうる」のです（そして来るべき意味もまた「隠され」、「隠蔽」されるのです […]）（NCOG, p. 29/p. 37）。

この引用において、メルロ=ポンティは言語交流の潜在的な側面を重要視している。ある理念が意味を形成し、「語」に分節された後、「書き物」として残る。そしてこの「書き物」は後続する世代に継承される。メルロ=ポンティによると、「語」や「書き物」という形での継承は、一度形成された意味が「忘却」された事態のことである。しかしこの文脈における「忘却」は、意味が無に帰される事態ではない。むしろ先立つ世代によって表現された意味が「沈殿」し、再び「活性化」される可能性を意味する。「沈殿は必然的です。なぜなら科学知は『伝播』であり、生物学的な⁹意味における『再生』のようなものだからです」（NCOG, p. 30 / p. 39）。このように意味が伝播されるプロセスは、一度忘却された意味が再び呼び覚まされるプロセスである。忘却のような否定的な契機は意味の発生にとって必要な現象である。ゆえに『講義』におけるメルロ=ポンティは、「忘却」を意味の消失ではなく、「豊穡な忘却」（NCOG, p. 29/p. 38）と定義する¹⁰。

⁹ 修正版は *historique* を *biologique* に修正している。

¹⁰ このように「忘却」は記憶の保存と対立せず、むしろ固有の働きを備えている。1954年のコレージュ・ドゥ・フランス講義におけるメルロ=ポンティはこうした忘却の働きをフロイトによるヒステリー（ドーラの症例）の分析から提示している。「彼女〔ドーラ〕が織り上げた忘却は、このように、彼女を忘却されたもの

すでに見たように、『起源』におけるフッサールは、対象を「名付ける」ことで客観化する作業を言語の本質と考えていた。これに対して、メルロ＝ポンティは客観化に対して批判的なスタンスを取る。このことは意味が再度活性化される現象に関する彼の考えから明らかである。「意味、とりわけ豊穡な意味、常に新たな獲得を基礎づける意味が存在するのは沈殿と痕跡によってのみです〔ここではフッサールを追い立てることで。つまり制度は包摂的な思考ではなく、開かれた思考であり、実効的な中心に属する志向や企図ではなく、修正されるだろう〔中心ではなく〕傍らにある志向なのです。この志向は一つの目的の定立ではなく、あるスタイルの定立であり、全面的な把握ではなく、側方的な隔たり、深いところから引き寄せられた藻のようなものだからです〕」（NCOG., p. 30 / pp. 39-40）。忘却された意味が再び活性化される事態は一つの「目的」の達成ないし「終わり」ではない。むしろ再活性化された意味はさらに新たな意味を生み出す可能性を含意している。そしてこの「意味」に関わる志向作用も意味が再活性化されることで充実されるだけでなく、さらなる「修正」を被る可能性を含む。ゆえに、『講義』においては、「全体的な再活性化の不可能性」（NCOG., p. 30 / p. 40）が主張される。すでに見たように、フッサールは言語を理念の客観化（「名付け」）と沈殿の二点から説明していた。メルロ＝ポンティは、フッサールの言語論において前者よりも後者を評価していることが理解される。理念を「言語の内に」定位し、その機能を客観化という枠組みから解放したこと——以上二点が『講義』におけるメルロ＝ポンティのフッサール解釈の主要な特徴である。

III 『言葉への途上』の導入

III-1 言語の探求

『講義』が進むにつれてメルロ＝ポンティによる言語への考察はさらに深化されてゆく。『起源』における言語への言及箇所（Hua. III, pp. 369-370）に、彼は次のような解釈を提示している。「言語は人類の地平にとって本質的な事柄なのです。言語は地平に対してその『開け』を付与し、地平を終わりのないものとし、言語の内こそ、人間の環境世界は客観的なものとなります。なぜならその世界は『名を付与することが可能』な世界だからです」（NCOG., p. 44 / p. 58）。この引用における客観性に関する解釈は、フッサールの『起源』における説明と明らかに齟齬をきたしている。フッサールは理念が客観化され、万人にアクセスが可能となるプロセスを重要視していた。「言語」はこのプロセスのなか

との秘密に関係させるようにした。忘却は保存の対立物ではない。なぜなら忘却はまさに保存するからである」（Cf. M. Merleau-Ponty, *L'Institution La Passivité. Notes de cours au Collège de France (1954-1955)*, op. cit., p. 257）。

の一契機である。これに対して、メルロ=ポンティは理念の言語による客観化ではなく、客観化に寄与する言語の役割をより重要視している。上記の引用によると、「言語」は人間の諸活動に固有の地平を開く機能を備える。事物の客観的な理解や他者との世界内における相互理解は、言語による地平の開示と切り離せないのである。ゆえに「客観的な存在〔語られた世界〕」は、地平において「言表可能なものに基礎づけられている」（NCOG., p. 44/p. 57）とメルロ=ポンティは指摘する。

ここで問題となる「言語」の表現機能はもはや理念に立脚した本質的な存在と関わりを持たない。メルロ=ポンティはフッサールが『イデー 1』において提示した形相的変更という方法を用いて言語の本質（「非-言語という仮説によって不変の存在として導出された言語の本質」、cf. NCOG., p. 46/p. 60）が何かを問う¹¹。その結果、「ところが不変的な存在に属するこの方法が言わんとしているのは次のことです。分析上で言語のうちに内包されている言語の特質が顕わとなったのではなく、非論理的な可能性（強調は引用者）、言語に宿る力ないし潜在的な力が顕わとなったのです」（*Ibid.*）と指摘する。言語の本質は、表現の際に行使される諸特質（文法、統語、語彙、等々）ではない。矛盾しているが、言語表現において顕現する本質は「非論理的な可能性」である。フッサールが言語表現を「成人」の「成熟」した表現に限定していたのに対して、メルロ=ポンティは言語が論理的な特質に還元できない側面を備えていることを主張しているのである。

III-2 ハイデガー『言葉への途上』

言語表現に備わる「非論理的な可能性」に言及した後、メルロ=ポンティは『起源』の注釈を中断し、ハイデガーの『言葉への途上』を導入する¹²。メルロ=ポンティが言及する箇所は、『言葉への途上』

¹¹ フッサールによると、「形相的変更」は志向対象に備わる理念的かつ不変の意味を抽出することを目的としている。『講義』と同時期に、メルロ=ポンティはこの方法を一種の抽象化と批判している。「ゆえに、形相的変更によって私は切り離された諸本質からなる一つの秩序やある論理的に可能なものに至るわけではない。それが私に提供する不変の存在は構造的に不変の存在であり、下部構造の存在 *Etre* である。この存在は、結局のところ、この世界の世界定立 *Weltthesis* のなかでのみ充実化されるにすぎないのである」（M. Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible, suivi de Notes de travail* (1964), texte établi par Claude Lefort, Paris, Gallimard, coll. « tel », 1999, p. 278)。

¹² 前年度（1958-59年）にメルロ=ポンティはハイデガーの諸著作を扱った講義を行っている。このなかでも、ハイデガーの『思惟とは何の謂いか』の「われわれとともに発動する精神の言葉」を次のように解釈している。「われわれが動くのではなく、言葉の本質こそがわれわれとともに動く」と非主体的な表現の重要性を

に収められた「言葉」と題された講演論文の最初の部分（GA12, pp. 10-11 / p. 4）である。この言及箇所
の議論をまず確認してみたい。

この箇所でハイデガーは言葉の「本質」（GA12, p. 9/p. 4）とは何かという問いを立てつつ、議論を展開している。ハイデガーが主張するには、「言葉そのものとはまさに言葉であって、それ以外の何ものでもない。言葉そのものこそ言葉なのである」（GA12, p. 10）。言葉を発する行為は、「悟性」（*Ibid.*）に立脚した主体の表現でもなければ、「論理」（*Ibid.*）という枠組みの内部で構築された表現でもない。ゆえに言葉を発するのは「悟性」に立脚し、「論理」を行使する発話者ではなく、当の「言葉が語る *Die Sprache spricht*」（GA12, p. 10/p. 5）とハイデガーは主張する。ハンス・イェーガーが適切に指摘しているように¹³、この時に、言葉は何らかの事柄を表現しておらず、個別の指示対象を備えてない。言語活動は特定の指示対象（「理念的客観性」）を備えていることをフッサールは主張した。これに対してハイデガーが主張するには、言語の本質を突き詰めると、言葉が、指示対象を持たずに、自ずから語り出す事態が見出されるのである。

ところで、「言葉が語る」という表現はそのものとして同語反復である。しかしハイデガーの説明が秀抜なのは、このように言語の本質を同語反復でしか特徴づけられない地点にまで引き戻しつつ、そこから語る主体の存在様態を説明しているところにある。この説明のために、彼はハーマンがヘルダーに宛てた手紙を引用している。「その語句〔「たったひとつの語句」〕とは：理性は言語（ロゴス）であり、ロゴスであるの一言に尽きるのです。この真髄ともいうべき語句に私は嘔りつき、死ぬまでこの言葉で悩み抜くことでしょう。この問題の深みに対して私の心は依然として闇のままです。私はこの深淵 *Abgrund* を解く鍵を持った、黙示録の天使の到来を待ち続けるわけなのです」（GA12, pp. 10-11 / p. 6）。ハイデガーの注釈によると、ハーマンは理性を問ううちに「言語」という「深淵」にはまり込んだ（GA12, p. 11 sqq. / p. 6）。言葉が語るという事態に直面した人間は、自らの表現行為の背後に一切の根拠を持たないこと（*Abgrund*）に気づいたのである。このように言葉が、表現上において、根拠を失った状態は、ハイデガーによると、必ずしも無秩序を意味しているわけではない。「あの：言葉は言葉である。言葉は語り出す。いまここに述べた命題が言い表している深遠の中へ我々が敢えて落ち入るとしても、我々は空虚の中にすっかり呑み込まれてしまうわけではない。我々は高みに落ち込むのであり、この高みのもつ高さが深みを開いてくれるのである。この高みと深みの二者が、人間の本質を保つべき

提示している。Cf. M. Merleau-Ponty, *Notes de cours 1959-1961*, préface de Claude Lefort, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la philosophie », p. 134.

¹³ Cf. Hans Jaeger, *Heidegger und die Sprache*, Bern, Francke Verlag, 1971, p. 81.

我々の居場所を見出すために、我々がどこに住みつけばよいのか、その場所を残る隈なく測りつくしてくれるのである」(GA12, p. 11 / p. 6)。「言葉が語る」という現象は、人間から語る行為を剥奪するだけではない。この現象の内部で、人間の存在の「本質」と「居場所」が開示される。このように、ハイデガーは、言語の機能を主体の表現という枠組みから解放することで、人間の存在に固有の場を提示しようとするのである。

III-3 ハイデガー経由後の『講義』

『講義』における『言葉への途上』への言及は、以上に提示した講演論文「言葉」の一部分のみである。この言及の後、彼は『起源』の解説に戻る。しかしハイデガーへの言及は『講義』における『起源』の言語論に関する考察に決定的な方向性を与えることになる。

最初に、メルロ＝ポンティは、ハイデガーの言語（「言葉」）論に全面的に賛同する。「言語はある意味において一次的であり、基礎づけられておらず、根拠を欠いており、開けであり、高みへの転落なのです」(NCOG., pp. 49-50 / p. 63)。フッサールによると、言語は理念を客観化するための一契機である。理念が前提とされる点において、確かに「言語」は特定の理念に基礎づけられている。しかしメルロ＝ポンティがハイデガーの言語論を踏まえつつ言うには、「われわれが語っている時はそうではない」(NCOG., p. 50 / p. 63)。表現の只中にある言語は必ずしも特定の理念に基礎づけられているわけではないのである。以上のように、『言葉への途上』経由後のメルロ＝ポンティは、表現の只中にある言語の働きを重要視するようになる。

次に、メルロ＝ポンティは、この極めて特殊な言語を「作動中の言語」(*Ibid.*)と呼ぶ。この「言語」は「基礎づけるもの」にも「基礎づけられたもの」(NCOG., p. 60 / p. 75)にも属さず、自ずから生成（「自成の只中にある言語」、cf. NCOG., p. 67 / p. 86）する。この言語が作動している間、われわれは言語を「所有」しつつ表現のための道具として使用しているのではない。むしろ「言語がわれわれを所有している」(NCOG., p. 62 / p. 80¹⁴)。ハイデガーは言語が、表現上において、自ずから語り出す事態を提示した。ハイデガーの言語論に賛同しつつ、メルロ＝ポンティは、言語の本質は言語主体ではなく、言語そのものにあることを主張しているのである。

¹⁴講義に先立つ日付（1959年5月）の『研究ノート』でもメルロ＝ポンティは同様の指摘をしている。「つまり諸事物がわれわれを所有しており、われわれが諸事物を所有するのではないということである。[...] つまり言語がわれわれを所有し、われわれが言語を所有するのではないということである」(M. Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible, suivi de Notes de travail, op. cit.*, p. 244)。

それでは理念に基礎づけられない言語表現とはいかなる特徴を備えているのか。『講義』におけるメルロ=ポンティによると、この種の言語表現は世界、他者と不可分に結びついた表現である。「フッサールの真の思索は次の通りです。つまり人間、世界そして言語が錯綜し、絡み合っているということです」(NCOG., p. 50 / p. 64)。「作動中の言語」(Ibid.)は、特定の理念に立脚した表現ではなく、むしろ語る私と世界あるいは他者を結びつける役割を担う。さらに先の箇所、著者はこの考え方を詳しく説明する。「発話という絡み合い——思索そして自我と他者の絡み合い——。了解する行為、それは他者において語ること——遡及的に語ること——なのです。語ること、それは外部からそうするように自らに耳を傾け、自らを了解することなのです」(NCOG., p. 57 / pp. 182-183¹⁵)。メルロ=ポンティが主張するには、言語表現は「他者」ないし「外部」の側から自らを理解し、表現する作業である。言語表現は、特定の理念による基礎づけよりも、外部からの了解可能性を必要とするのである。このように見ると、メルロ=ポンティの言語論の位相は明らかである。彼が重要視するのは、理念による言語の基礎づけという縦の関係ではなく、私と外部の世界ないし他者との地平を媒介とした関係である。

1) 語る主体の介在しない極めて非主体的な言語表現、2) 理念による基礎づけを被ることのない言語表現、3) そして自己と世界ないし自己と他者の関係を含意した言語表現——以上の三点をメルロ=ポンティはハイデガーの「言葉が語る」というテーゼから提示しつつ、『起源』を読み直しているのである。

以上のような仕方で、メルロ=ポンティは言語を理念による基礎づけから解放する。しかし『講義』の説明に従うなら、彼は必ずしもフッサールが提示する「理念」という概念そのものを放棄したわけではない。確かに、「理念」はもはや言語活動を基礎づけることはない。しかし言語表現を恒常的に基礎づけるのをやめる代わりに、理念性は言語表現における私と他者あるいは私と世界の関係から偶発的に生じるようになる。この偶発的な理念の発生をメルロ=ポンティは「理念性の炸裂もしくは創出」(NCOG., p. 50 / p. 64)と呼ぶ。さらに先の箇所、こうした偶発的な側面を著者は詳しく説明している。「理念性とは何らかの過剰のことです […]。[理念性は語られた発話ではなく、語る発話なのでしよう。つまり語ることの本質に属する事実なのでしょう]」(NCOG., p. 53 / p. 68)。作動中の言語のなかに含意される私と世界あるいは私と他者の関係を通じて、理念は一種の「過剰」として偶発的に表現される。特定の理念性が言語表現を基礎づけるのではなく、前者は非主体的な表現行為（「言葉が語る」）を通じて言語主体に対して極めて間接的な形で表出する。ゆえに、『講義』におけるメルロ=ポンティは、言語を理念による基礎づけから解放した後、「理念性と発話の同時性」(NCOG., p. 65 / p. 84)を主張するのである。ハイデガーの「言葉が語る」というテーゼからメルロ=ポンティは、理念の

¹⁵ この箇所はPUF版では本文中に入れられているが、修正版では余白に入れられている。

基礎づけを被ることのない「作動中の言語」を提示した。ところがこの作業は、言語表現における理念の存在を放棄するのが目的ではなく、理念が基礎づけとは別様に顕現する様態（理念性の「炸裂」、
「過剰」）を提示することを目的としていたのである。

結論

メルロ＝ポンティの『講義』におけるハイデガーへの言及は『言葉への途上』の一部分だけであり、決して詳細なものではない。しかしその重要性は、以上のように『講義』の議論を検討してみると、明らかである。ハイデガーの「言葉が語る」というテーゼにより、メルロ＝ポンティは、言語表現が理念を「基礎づけるもの」でも理念によって「基礎づけられるもの」でもないと考えようになった。この考えは『言葉への途上』の導入を経て確信へと変わり、さらに言語表現における非主体的な側面（「言語がわれわれを所有する」）が強調されるようになる。そして『講義』の後半になると、彼は、「理念性」が言語表現と同時（「理念性と発話の同時性」）に顕現すると考えるようになる。『言葉への途上』を媒介として『講義』における言語の考察は、フッサールが『起源』において提唱する「理念性」の新たな側面を提示したのであり、またそれがメルロ＝ポンティの『講義』における独自の、また極めて特殊なテーゼとなったわけである。

またハイデガーを経由した『講義』の言語論は、思想史上でも、ある程度の意義を備えていることが認められる。言語表現を理念性よび基礎づけから隔てるスタンスは、メルロ＝ポンティ以後のフランス現象学運動の大きな特徴である。エマニュエル・レヴィナスは、理念性の本質的な構造に回収されない地点に言語表現（「語ること」）を定位している。¹⁶ マルク・リシールは、事象の意味が、基礎づけを被ることなく、自ずから発生する現象（「自成する意味」、「言語現象」¹⁷）を提示している。メルロ＝ポンティによるハイデガー『言葉への途上』の導入は、確かに『起源』に関する特殊な一解釈である。しかしそれが、同じ程度において、重要な試みであったことはこうした歴史的視点からも明らかである。

¹⁶ Emmanuel Levinas, *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence* (Martinus Nijhoff, 1978), Kluwer Academic, Le Livre de Poche, 2004, pp. 65-66.

¹⁷ M. Richir, « La refonte de la phénoménologie », *Annales de phénoménologie*, n° 7, Beauvais, Association pour la promotion de la phénoménologie, 2008, p. 204 (マルク・リシール、「現象学の鑄直し」、拙訳、『現代思想 フッサール：現象学の深化と拡張』、12月臨時増刊号、青土社、平成21年12月、319ページ）。